

令和 6 年度

食物アレルギーに関する食品表示に関する調査研究事業  
報告書

令和 6 年 9 月  
消費者庁

※本資料中のデータ及び図表を転載使用等される場合は、消費者庁食品表示課までご連絡願います

## 【目 次】

### 1. 即時型食物アレルギーによる健康被害に関する全国実態調査

## 即時型食物アレルギーによる健康被害に関する全国実態調査

研究代表者 海老澤 元宏 国立病院機構相模原病院 臨床研究センター

研究協力者 杉崎 千鶴子 国立病院機構相模原病院 臨床研究センター

佐藤 さくら 国立病院機構相模原病院 臨床研究センター

### A. 研究目的

我が国の即時型食物アレルギーの変遷と現状を明らかにし、“食品表示法に基づくアレルゲンを含む食品に関する表示”の特定原材料等の妥当性や改正の必要性を検討し、また、同法の遵守の状況を推測する。これ以外にも最新の大規模な食物アレルギーの疫学情報を基礎研究や臨床研究の資料として提供する。

### B. 研究方法

平成 14 年度に食品衛生法に基づく食物アレルギー表示制度が完全施行され、平成 14 年以降 3 年に一度即時型食物アレルギーに関するデータを積み重ねてきた。過去 7 回の調査の協力医師、調査対象、調査方法全てを踏襲し、継続性を重視した。

調査の協力医師はアレルギーを専門とする医師（日本アレルギー学会指導医及び専門医並びに日本小児アレルギー学会会員）の中で調査の主旨に賛同を得られた者とした。協力医師の募集に際し、個人情報保護の観点から日本アレルギー学会及び日本小児アレルギー学会の理事会に調査協力を要請し、本研究事業の公共性を勘案して承認された。具体的には Web 上に公開されているアレルギー専門医のリストの二次利用の承認、非公開である日本小児アレルギー学会会員の電子媒体の名簿の提供を受け、計 6,829 名に協力を依頼した。なお、本研究は国立病院機構相模原病院倫理委員会の承認を得て実施した（倫理 2022 年度-026）。

調査対象は過去の調査対象と同様に、“食物を摂取後 60 分以内に何らかの反応を認め、医療機関を受診した患者”とした。調査項目も過去の調査の基本的な項目や様式から変えず、名前（イニシャル）、性別、年齢、原因抗原の摂取食物種類（自由記載）、原因抗原、臨床症状（皮膚、呼吸器、粘膜、消化器、全身から選択方式と自由記載方式の併用）、治療項目、原因抗原の特異的 IgE 値、転帰及び初発/誤食とした。誤食は加工食品の表示ミスかそれ以外によるものか区別した。

調査は令和 5 年 1 月から 3 か月ごとに 4 期に分け、期ごとに報告を受けた。報告ははがきによる郵送又は電子メールによるデジタルデータの送付とした。なお、食物経口負荷試験や経口免疫療法により誘発された症状は調査の対象としていない。年齢群別解析は 0 歳群、1・2 歳群、3・6 歳群、7・17 歳群、18 歳以上群に分けて検討した。なお、原因抗原の解析では、アレルギー表示においてクルミが令和 5 年に表示義務、マカダミアナッツが令和 6 年に表示推奨、カシューナッツが症例数の増加等を踏まえて表示義務に向けた検討が行われていることを受けて、品目別に解析を行った。

### C. 研究結果

#### 1. 解析対象

のべ 772 名の医師から協力を得て、6,562 例の報告を受けた。そのうち、原因物質が特定されていない 353 例、原因物質が食物以外のもの 96 例（うちアニサキス 75 例、ダニ 12 例）、性別、年齢、転帰等記載内容に不備があった 80 例を除外し、6,033 例を解析対象とした。

#### 2. 年齢、性別

年齢は中央値が 3 歳（範囲 0・83 歳）、最頻値は 0 歳の 1,418 例で 23.5% を占めた。また、1 歳が 12.8%、2 歳が 9.5% で、2 歳までに 45.8% を占め、6 歳までに 74.4% を占めた（図 1）。各年齢群の症例数は 0 歳群が 1,418 例、1・2 歳群が 1,347 例、3・6 歳群が 1,722 例、7・17 歳群が 1,228 例、18 歳以上群が 318 例であった。

男女比は 1.34 (男性 3,457 例/女性 2,576 例) で男性に多い傾向であったが、年齢群別には異なり 0 歳群から 7-17 歳群までは男性の割合が多く、18 歳以上群では女性が多かった。

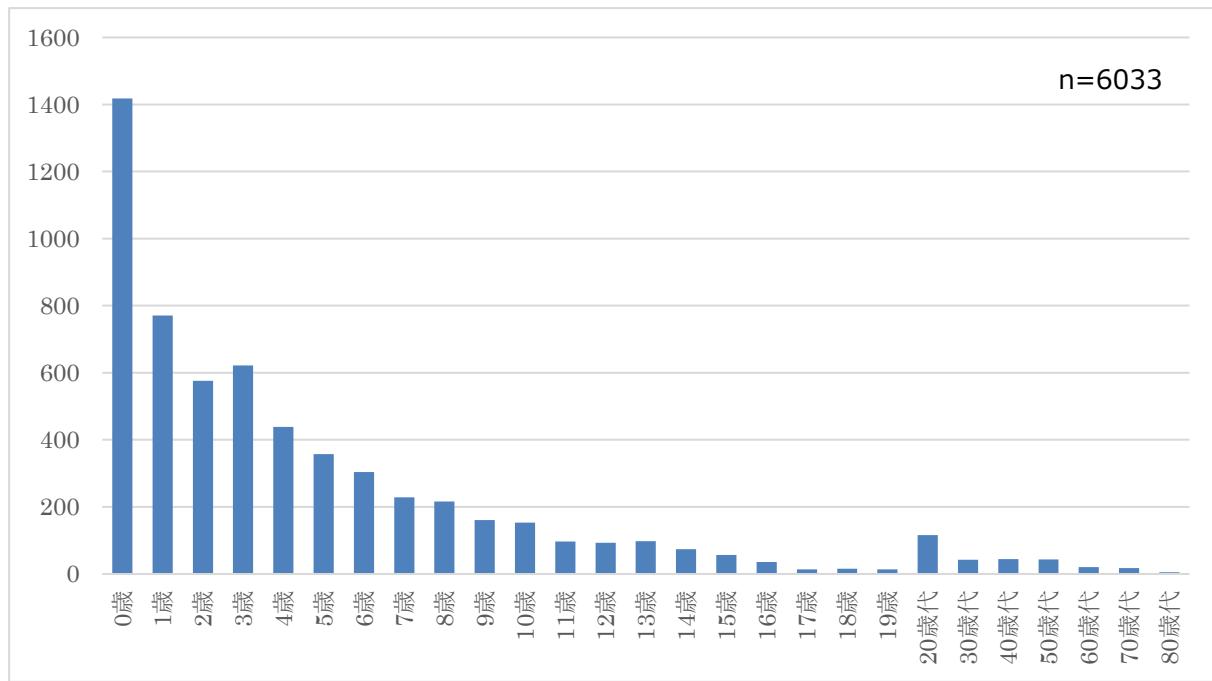


図 1 年齢分布

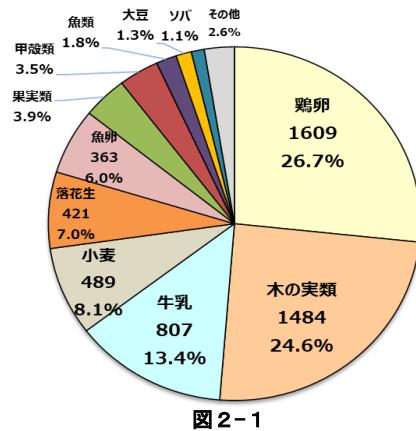
※20 歳以上は 10 代区切りで集計した結果である。

### 3. 即時型食物アレルギーの原因食物

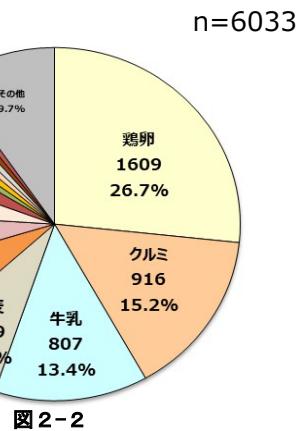
#### 1) 粗解析

過去の調査では類別に報告していたため、比較できるように類別の原因食物を図 2-1 として示す。原因食物は鶏卵が最も多く 26.7% (1,609 例) を占めた。木の実類として 24.6% (1,484 例) で第 2 位であった。品目別には鶏卵以下、クルミが 15.2% (916 例)、牛乳が 13.4% (807 例) であった (図 2-2)。落花生までの上位 5 品目で 70.3% を占め、さらに、イクラ、カシューナッツ、エビ、キウイ、大豆と続いた。木の実類の内訳を表 1 に示す。クルミが木の実類の 61.7% (916 例) で最も多く、次いで、カシューナッツ 18.8% (279 例)、マカダミアナッツ 4.6% (69 例)、ピスタチオ 3.4% (50 例)、アーモンド 3.1% (46 例)、ペカンナッツ 2.4% (35 例)、ヘーゼルナッツ 1.8% (27 例)、その他ココナッツ、松の実、クリの報告があった。

図 2 原因食物



即時型食物アレルギーの原因食物 (類別)



即時型食物アレルギーの原因食物 (品目別)

注釈：原因食物の頻度(%)は小数第 2 位を四捨五入したものであるため、その和は小計と差異を生じる。

表1 木の実類内訳

種類	n	木の実類中の%	全体における%
クルミ	916	61.7%	15.2%
カシューナッツ	279	18.8%	4.6%
マカダミアナッツ	69	4.6%	1.1%
ピスタチオ	50	3.4%	0.8%
アーモンド	46	3.1%	0.8%
ペカンナッツ	35	2.4%	0.6%
ヘーゼルナッツ	27	1.8%	0.4%
ココナッツ	5	0.3%	0.1%
松の実	3	0.2%	0.0%
クリ	1	0.1%	0.0%
木の実類 (ミックス・分類不明)	53	3.6%	0.9%
木の実類 合計	1,484		24.6%

## 2) 年齢群別解析

## i) 粗解析

各年齢群において5%以上を占める食物を表2に示す。0歳群は鶏卵、牛乳、小麦で95.6%を占めた。1・2歳群は鶏卵、クルミ、牛乳、3-6歳群はクルミ、落花生、イクラ、7-17歳群はクルミ、牛乳、鶏卵、18歳以上群は小麦、エビ、大豆が上位3品目であった。

表2 年齢別原因食物 (粗集計)

	0歳 (1,418)	1・2歳 (1,347)	3-6歳 (1,722)	7-17歳 (1,228)	≥18歳 (318)
1	鶏卵 60.6%	鶏卵 33.7%	クルミ 28.3%	クルミ 17.2%	小麦 21.1%
2	牛乳 21.4%	クルミ 14.6%	落花生 12.0%	牛乳 13.8%	エビ 16.7%
3	小麦 13.6%	牛乳 12.9%	イクラ 9.4%	鶏卵 10.7%	大豆 8.2%
4		イクラ 8.8%	鶏卵 8.9%	落花生 9.9%	
5		落花生 5.7%	牛乳 8.6%	小麦 8.1%	
6		小麦 5.2%	カシューナッツ 8.4%	エビ 6.9%	
7				カシューナッツ 5.2%	
小計	95.6%	81.0%	75.7%	71.8%	45.9%

注釈: 各年齢群で5%以上を占める原因食物を示した。また、小計は各年齢群で表記されている上位食物の頻度の集計である。

## ii) 初発解析

初発例と誤食例の比率は各年齢群で差があり、0歳群では93.7%が初発例であったが、年齢が上がるにつれて初発例の頻度が低くなり、7-17歳群では40.0%であった。18歳以上群では再び初発例が増加し51.6%であった(図3)。

初発例3,981例についての結果を示す(表3)。初発例の原因食物は、0歳群は鶏卵、牛乳、小麦の順であったが加齢とともに大きく変化し、1・2歳群では鶏卵、クルミ、イクラ、3-6歳群はクルミ、イクラ、落花生、7-17歳群はクルミ、エビ、イクラ、18歳以上群は小麦、エビ、大豆の順であった。クルミは1・2歳群で2位(19.6%)、3-6歳群で1位(34.5%)、7-17歳群で1位(18.7%)といずれも上位2品目に入っていた。イクラは1・2歳群で3位(13.0%)、3-6歳群で2位(14.1%)、7-17歳群で3位(7.9%)であった。エビは7歳以降での割合が高く、7-17歳群で2位(12.4%)、18歳以上群も2位(16.5%)であった。小麦は0歳群で3位(13.1%)であった以降は

初発例としての割合は低く、1・2歳群1.4%、3-6歳群0.5%、7-17歳群3.9%と推移し、18歳以上群で1位(18.9%)であった。

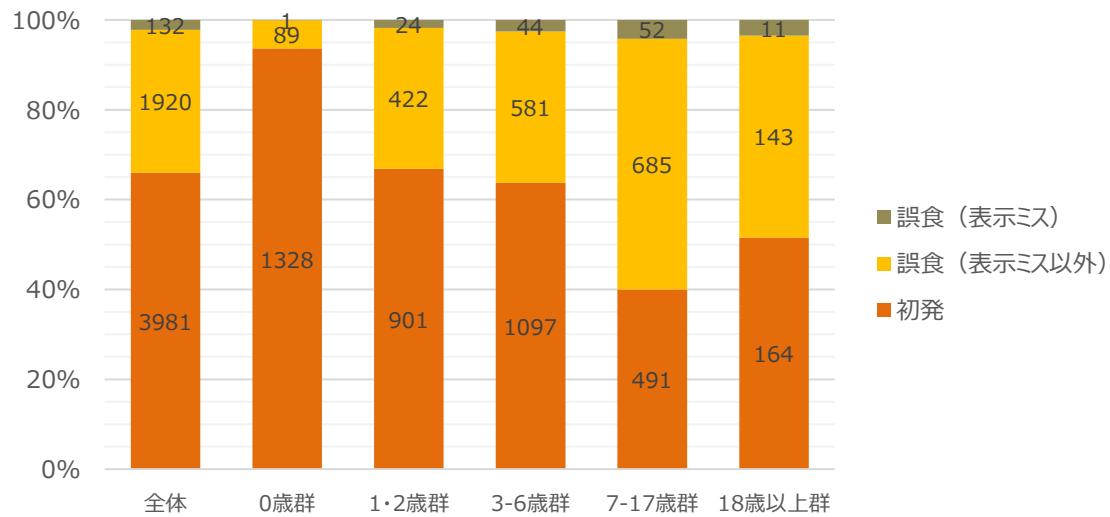


図3 初発例と誤食例の割合

表3 年齢群別原因食物（初発例）

	0歳(1328)	1・2歳(901)	3-6歳(1,097)	7-17歳(491)	≥18歳(164)
1	鶏卵 61.8%	鶏卵 28.7%	クルミ 34.5%	クルミ 18.7%	小麦 18.9%
2	牛乳 20.9%	クルミ 19.6%	イクラ 14.1%	エビ 12.4%	エビ 16.5%
3	小麦 13.1%	イクラ 13.0%	落花生 11.6%	イクラ 7.9%	大豆 9.1%
4		落花生 7.4%	カシューナッツ 9.2%	カシューナッツ 6.3%	
5		カシューナッツ 6.5%			
小計	95.8%	75.4%	69.4%	45.4%	44.5%

注釈：各年齢群で5%以上の頻度の原因食物を示した。また、小計は各年齢群で表記されている原因食物の頻度の集計である。  
原因食物の頻度(%)は小数第2位を四捨五入したもののため、その和は小計と差異を生じる。

### iii) 誤食解析

誤食2,052例についての結果を示す（表4）。誤食例の原因食物は0歳群、1・2歳群は鶏卵、牛乳、小麦が上位3品目を占めていた。3-6歳群及び7-17歳群は牛乳、鶏卵、クルミ、18歳以上群は小麦、エビ、落花生が上位3品目であった。

誤食の理由は“食品表示ミス以外”が1,920例(93.6%)、食品表示ミスが132例(6.4%)であった。食品表示ミスによる誤食例の原因食物の内訳を表5に示す。特定原材料8品目の表示ミスが119例(90.2%)であった。

表4 年齢群別原因食物（誤食例）

	0歳(90)	1・2歳(446)	3・6歳(625)	7・17歳(737)	≥18歳(154)
1	鶏卵 42.2%	鶏卵 43.7%	牛乳 22.2%	牛乳 21.8%	小麦 23.4%
2	牛乳 30.0%	牛乳 29.8%	鶏卵 20.2%	クルミ 16.1%	エビ 16.9%
3	小麦 21.1%	小麦 12.8%	クルミ 17.6%	鶏卵 15.7%	落花生・大豆 7.1%
4			落花生 12.8%	落花生 14.1%	
5			小麦 8.6%	小麦 10.9%	クルミ 6.5%
6			カシューナッツ 7.0%		牛乳 5.2%
小計	93.3%	86.3%	88.5%	78.7%	66.2%

注釈：各年齢群で5%以上の頻度の原因食物を示した。また、小計は各年齢群で表記されている原因食物の頻度の集計である。

原因食物の頻度(%)は小数第2位を四捨五入したものであるため、その和は小計と差異を生じる。

表5 表示ミスによる誤食例の内訳

	原因食物	n	(%)
●	牛乳	37	28.0%
●	クルミ	21	15.9%
●	鶏卵	21	15.9%
●	小麦	18	13.6%
●	落花生	14	10.6%
○	カシューナッツ	8	6.1%
●	ソバ	4	3.0%
●	エビ	3	2.3%
○	ゴマ	2	1.5%
●	カニ	1	0.8%
○	アーモンド	1	0.8%
○	イクラ	1	0.8%
(○)	木の実類(分類不明)	1	0.8%

●特定原材料（表示義務）

○特定原材料に準ずるもの（表示推奨）

注釈：原因食物の頻度(%)は小数第2位を四捨五入したものであるため、その和は小計と差異を生じる。

#### 4. 出現症狀

### 1) 粗解析

皮膚症状が 81.2% (4,900 例)、呼吸器症状が 39.7% (2,396 例)、消化器症状が 37.3% (2,248 例)、粘膜症状が 32.5% (1,958 例)、ショック症状が 9.7% (586 例) であった (図 4)。

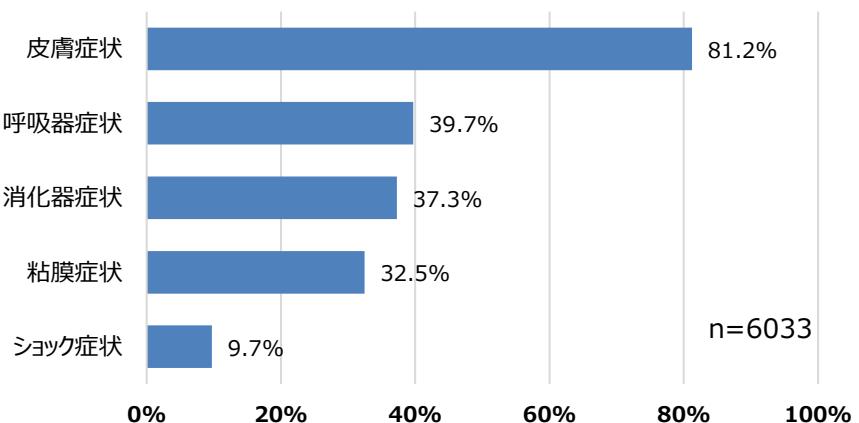


図4 出現症状

## 2) ショック症状

ショック症状を認めた586例において、年齢は中央値3歳、最高齢は83歳であった。最頻値は0歳群で114例であった。年齢群別のショック症状の発症率は、0歳群が8.0%、1・2歳群が8.3%、3・6歳群が10.3%、7・17歳群が11.0%、18歳以上群が14.8%で、18歳以上群の発症率が高かつた。初発でショック症状を引き起こした症例は58.7%（344例）であった。

ショック症状を引き起こした原因食物の上位3品目はこれまで鶏卵、牛乳、小麦であったが、今回の調査ではクルミの割合が増加し、第3位となった。その他の木の実類については、カシューナッツが第5位6.3%（37例）、マカダミアナッツが第9位2.2%（13例）であった（図5）。

5症例以上ショック症状を引き起こした品目について、即時型症例に対する割合を表6に示す。マカダミアナッツが18.8%と最も高く、次いで小麦15.7%、ピスタチオ14.0%であった。上位10品目中5品目が木の実類であった。

表6 即時型症例に対するショック症例の割合

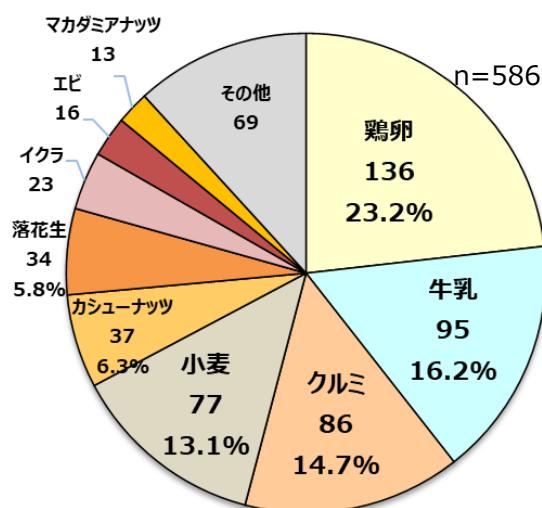


図5 ショック症状を呈した原因食物

原因食物	即時型	ショック	(%)
	症例数	症例数	
マカダミアナッツ	69	13	18.8%
小麦	489	77	15.7%
ピスタチオ	50	7	14.0%
カシューナッツ	279	37	13.3%
木の実類 (分類不明)	53	7	13.2%
牛乳	807	95	11.8%
クルミ	916	86	9.4%
エビ	183	16	8.7%
大豆	81	7	8.6%
鶏卵	1,609	136	8.5%
落花生	421	34	8.1%
イクラ	344	23	6.7%

## 5. アドレナリン使用及び転帰

全症例の 24.9% (1,502 例) にアドレナリンが投与され、22.4% (1,351 例) で入院加療を要した。一方、ショック症状を認めた 586 例のうち、63.7% (373 例) にアドレナリンが投与され、63.1% (370 例) が入院加療を要した。

## 6. 食物アレルギー表示の妥当性の検証

表示義務の 8 品目は 74.9% (4,521 例) を占め、表示推奨の 20 品目を含めると 92.9% (5,607 例) を占めた (表 7-1)。表示推奨の 20 品目で 5 症例未満の品目はオレンジ 4 例、牛肉、鶏肉、豚肉各 3 例、アワビ 1 例、ゼラチン 1 例であった。

ショック症例 586 例において、表示義務 8 品目は 76.3% (447 例)、表示推奨 20 品目を含めて 93.3% (547 例) を占めた (表 7-2)。表示義務のカニ並びに表示推奨のバナナ、サケ、サバ、牛肉、鶏肉及びアワビは報告がなかった。

また、令和 5 年度に表示推奨から削除されたマツタケの報告は 1 例のみであった。

表7 食物アレルギー表示の妥当性の検証

表7-1 即時型症例 n=6033

	原因食物	n	(%)
●	鶏卵	1,609	26.7%
●	クルミ	916	15.2%
●	牛乳	807	13.4%
●	小麦	489	8.1%
●	落花生	421	7.0%
○	イクラ	344	5.7%
○	カシューナッツ	279	4.6%
●	エビ	183	3.0%
○	大豆	81	1.3%
○	キウイ	80	1.3%
○	マカダミアナッツ	69	1.1%
●	ソバ	68	1.1%
	木の実類（分類不明）	53	0.9%
	ピスタチオ	50	0.8%
○	アーモンド	46	0.8%
○	モモ	37	0.6%
	ペカンナッツ	35	0.6%
○	ヤマイモ／ナガイモ	31	0.5%
	ヘーゼルナッツ	27	0.4%
●	カニ	25	0.4%
○	ゴマ	25	0.4%
○	リンゴ	22	0.4%
○	バナナ	20	0.3%
	魚類（分類不明）	19	0.3%
○	イカ	17	0.3%
	タラコ	14	0.2%
	アジ	12	0.2%
○	サケ	10	0.2%
	スイカ		
	メロン		
○	サバ	8	0.1%
	タラ		
	トマト		
	マグロ		
	タイ	6	0.1%
	ブリ		
	果実類（分類不明）	5	0.1%
	ココナッツ		
	サクランボ		
	ナシ		
	パイナップル		
	ミカン		
○	オレンジ	4	0.1%
	ほか7品目※1		
●	エビ・カニ	3	0.0%
○	牛肉		
○	鶏肉		
○	豚肉		
	ほか10品目※2		
	16品目※3	2	0.0%
○	アワビ		
○	ゼラチン	1	0.0%
	ほか40品目※4		

表7-2 ショック症例 n=586

	原因食物	n	(%)
●	鶏卵	136	23.2%
●	牛乳	95	16.2%
●	クルミ	86	14.7%
●	小麦	77	13.1%
○	カシューナッツ	37	6.3%
●	落花生	34	5.8%
○	イクラ	23	3.9%
●	エビ	16	2.7%
○	マカダミアナッツ	13	2.2%
○	大豆	7	1.2%
	木の実類（分類不明）		
	ピスタチオ		
○	アーモンド	4	0.7%
○	リンゴ		
●	ソバ	3	0.5%
	魚類（分類不明）		
○	イカ		
○	キウイ		
○	モモ		
○	ヤマイモ／ナガイモ		
	ペカンナッツ		
	松の実		
○	オレンジ	1	0.2%
○	ゴマ		
○	豚肉		
○	ゼラチン		
	アズキ		
	イチゴ		
	イヨカン		
	エンドウ		
	オート麦		
	果実類（分類不明）		
	キュウリ		
	魚卵（分類不明）		
	キンカン		
	コメ		
	シシャモ		
	タラコ		
	ナシ		
	パール柑		
	ブリ		
	ヘーゼルナッツ		
	マグロ		
	メロン		
●	カニ	0	0%
○	バナナ		
○	サケ		
○	サバ		
○	牛肉		
○	鶏肉		
○	アワビ		

※1 アカウオ、イチゴ、イワシ、キンカン、コチニール色素、サトイモ、シシャモ

※2 ウナギ、貝類（分類不明）、カレイ、コオロギ、トウモロコシ、ニンジン、ホタテ、松の実、マンゴー、ライ麦

※3 アザリ、イヨカン、オート麦、大麦、カツオ、カボチャ、魚卵（分類不明）、グレープフルーツ、サフラ、タケノコ、タコ、タマネギ、トピウオ魚卵、ハマチ、ビワ、ブルーベリー

※4 アズキ、アボカド、イチジク、いも及びでん粉類（分類不明）、エゴマ、エリスリトール、エンドウ、カキ、カンモンハタ、黄エンドウ、キュウリ、クミン、クランベリー、クリ、コメ、サメ、シネンジョ、シメジ、ジャックフルーツ、シラス、スタチ、スモモ、セロリ、ソラマメ、ニンニク、パール柑、ビール酵母、フキ、ブドウ、ブルーン、ホウレンソウ、ホッケ、マツタケ、メカブ、メバル、野菜類（分類不明）、ユズ、レンコン、数の子

#### D. 考察

前回調査(令和2年(2020年))では1年間を通じて1,089名の調査協力医師から6,677例が報告された。今回の調査では協力医師は約3割減少し772名であった。協力医師が減少した理由として、これまでがきで行っていた調査協力の同意をWEB上に限定したことが一因と考えられた。しかし、報告件数は6,562件で、前回調査と同程度の症例数であり、解析結果への大きな影響はないと考える。

年齢については、中央値が前回調査の2歳から3歳に上昇した。これは、0歳群が前回の30.9%から23.5%に減少、1・2歳群は23.6%から22.3%に減少し、3-6歳群は25.1%から28.5%に増加、7-17歳群は14.9%から20.4%に増加したことによる。18歳以上群では5.6%から5.3%とあまり大きく変化しなかった。3-6歳群と7-17歳群では、木の実類の頻度は上昇したが、その他の主な原因物質の頻度はおおむね変化しておらず、木の実類の顕著な増加が年齢中央値の上昇に関与したと考えられる。

原因食物については、前回調査で原因食物の上位3品目が鶏卵、牛乳、小麦から鶏卵、牛乳、木の実類になったことを報告した。今回の調査では、木の実類の割合は24.6%(1,484例)で、牛乳を抜いて第2位となった。第1位である鶏卵(26.7%)との差は小さく、木の実類は著しく増加していた。品目別の解析でも、木の実類の中で第1位であるクルミは牛乳を上回る症例数が報告され、鶏卵に次いで第2位(15.2%)となった。2005年以降の傾向をみると、上位品目の鶏卵、牛乳及び小麦がほぼ横ばいで推移した後、2017年以降は下落傾向であるのに対して、木の実類は2014年以降、増加している。前回調査ではクルミは7.6%であったことから、クルミの割合が約2倍に増加していた。また、クルミには及ばないが、カシューナッツの割合は前回調査の2.9%から4.6%と約1.6倍の増加、マカダミアナッツは0.7%から1.1%と約1.5倍増加していた。クルミとペカンナッツ、カシューナッツとピスタチオはそれぞれ強い交差抗原性があることが知られている。今回の調査では、ピスタチオは前回調査の0.4%から0.8%、ペカンナッツは0.3%から0.6%と約2倍に増加しており、クルミ及びカシューナッツ増加の影響が示唆される。

年齢群別では0歳群と1・2歳群では鶏卵が、3-6歳群と7-17歳群ではクルミが、18歳以上群では小麦の割合が最も高かった。クルミは1・2歳群で第2位(14.6%、前回調査第3位9.2%)、3-6歳群で第1位(28.3%、同第1位16.5%)、7-17歳群で第1位(17.2%、同第4位8.4%)、18歳以上群で第4位(4.4%、同第8位1.2%)で、前回調査と比較して0歳群以外の年齢群で著しく増加していた。カシューナッツは3-6歳群で第6位(8.4%、同第7位5.2%)、7-17歳群で第7位(5.2%、同第7位4.1%)で、クルミほどの増加率ではないが、幼児期以降で増加傾向であった。一方、小麦、果実類及び甲殻類の割合は前回調査と比べ、大きく変化していなかった。

初発例の原因食物については、0歳群では過去の調査とほぼ変わらない割合で鶏卵、牛乳、小麦の順であったが、その他の年齢群ではクルミとカシューナッツの増加が著しかった。1・2歳群ではクルミが19.6%・カシューナッツが6.5%であった。3-6歳群ではクルミが34.5%・カシューナッツ9.2%で合計43.7%と半数近くを占めた。7-17歳群でもクルミが18.7%・カシューナッツが6.3%であった。前回調査と比較して幼児期、学童期とともに初発例におけるクルミとカシューナッツの割合が著しく増加していた。

誤食例においてもクルミとカシューナッツの増加が認められた。前回調査では、学童期まで鶏卵と牛乳が上位2品目を占めており、加齢に伴う大きな変化を認めなかつたが、今回の調査ではクルミとカシューナッツの合計が3-6歳群で24.6%、7-17歳群で20.6%(カシューナッツは表外で4.5%)であった。

誤食例2,052例の中で“表示ミス”による健康被害は6.4%であり、これまでの調査と大きな変化を認めなかつた。食品表示法で食物アレルギー表示が管理されているにもかかわらず“表示ミス”による誤食は経年に減少していないことから、違反事例及び自主回収事例に関する情報や行政による監視の結果に関する情報の収集に引き続き努める必要がある。さらに、収集した情報をもとに“表示ミス”を防ぐための対策について情報提供する等、新たな対策を実施する必要があると考える。また、食物アレルギー患者や家族、学校等の栄養士がアレルギー表示を正しく理解し、安全に食品を購入でき

るよう、医師や管理栄養士等への啓発についても引き続き必要である。

ショック症状の発生率は 9.7% で過去の調査と比べ、変化を認めなかつたが、その原因食物についてはクルミの割合が増加し、第 3 位となつた（前回 8.8%、第 4 位）。また、ショック症例に対するアドレナリン投与率は 63.7%、入院率も 63.1% にとどまり、過去の調査結果と比べ改善していなかつた。アナフィラキシーの初期対応に関する医師への啓発や患者指導の強化が十分な成果を得られていない状況を把握し、改善するための対策の見直しを行うべきである。

表示の妥当性の検証については、表示義務 8 品目は 74.9% で、表示推奨の 20 品目を含めると 92.9% の原因食物をカバーしており、従来の報告と同様におおむね高いカバー率であった。一方、表示推奨の 20 品目で前回に引き続き報告が少なかつた品目はゼラチン（前回 1 例・今回 1 例）、アワビ（同 1 例・1 例）、鶏肉（同 4 例・3 例）、豚肉（同 4 例・3 例）、牛肉（同 5 例・3 例）であり、アレルギー表示の対象とする食品の見直しについては、本調査によるモニタリングを継続し、適切な時期に見直しのための議論ができる体制の維持が必要と考えられた。

#### E. 結論

令和 5 年（2023 年）調査結果から、2017 年、2020 年の調査に引き続き、クルミ、カシューナッツなどの木の実類の即時型食物アレルギーの健康被害が継続して増加傾向にあることが明らかになつた。中でもクルミは症例数が多く、鶏卵に次ぐ原因食物の第 2 位となつた。その他の木の実類のカシューナッツ、マカダミアナッツ、ピスタチオ及びペカンナッツの増加率も前回調査から 1.5 倍以上であり、今後の推移を注意深く観察すべきである。また、マカダミア、ピスタチオ、カシューナッツ等はショック症状を呈する症例が多く、初発時のリスク回避や誤食予防のための対策を速やかに講じる必要があり、引き続き“食品表示法に基づくアレルゲンを含む食品に関する表示”が適切に運用されるように注力していくべきと考える。